

## 説教余滴 3月29日、春愁愁思

バス停に立って東方を眺めると、数本の桜の花が咲いていました。25日のことです。

左手は白く高くこんもりとしています。その右手、やや下がった位置には、かなり赤みを帯びた花色が見えます。同じ桜でも種類が違うのでしょうか。田浦トンネルの手前にサクラが数本あります。横断歩道橋が邪魔になり、全く見えません。その下まで行って確認したのは、物好きにほかなりません。あの所に横断歩道も信号もないのは不都合だ、と言ったら笑われるでしょうね。朝早い時間には、岩沢さんの角から、国道を横断する人は結構います。橋を渡る気にはならないのでしょうか。歩道橋は老朽化しています。信号付き横断歩道にしたら喜ばれるのではないのでしょうか。

「春愁秋思」（しゅんしゅうしゅうし）という言葉があります。「春の日の物憂さと秋の日の物思い」と辞書にあります。春と秋はずいぶん違う、と勝手に思い込んでいるようです。春も秋も、物思ふ季節であることには変わりがないのです。その中身はどうでしょうか。

春も秋も、その季節特有の楽しみがあり、いかに楽しむか考えるでしょう。花見の宴楽、就職、就任の祝宴、収穫の祝い、月見の宴。

「春の野に霞たなびきうら悲し この夕かげに鶯なくも」

これは、万葉集にある大伴家持の歌です。天平勝宝5年2月23日の作と言いますから現行暦の4月上旬になります。いかにも春らしい舞台を仕立てながら、中頃の「うら悲し」は、その一切を打ち消しています。大伴家は、古代の宮廷で名門貴族。既に没落して少納言兵部少輔だったと言います。

「めでたさも中くらいなり おらが春」（信濃の俳人一茶）を思い出してしまいました。家持にとっては、この程度の位階・官職は、うら悲しさを誘うものだったのでしょうか。